



図画工作科の授業から学ぶ

図画工作科顧問校長 西気賀小学校 村松昌彦

4年に「ギコギコ トントン クリエイター」という題材があります。のこぎりでいろいろな形に切った木を組み合わせ、感じたこと、想像したことから表したいことを見付け、生活に使えるものをつくる題材です。初めて使うのこぎりでけがをしないように、安全な扱い方を指導するところに意識が向きがちですが、切った木を組み合わせて感じ、想像して表したいことを見付けるところが重要です。表したいものに合わせて木を切るのではありません。

本校では、3、4年生の複式学級が合同授業で本題材を扱っていました。担任は「自由に作っていいよ」では、作り始めない子がいるため支援が必要だと考えているようでした。

数日後、授業の様子を見に行くと、はじめに担任が子供たちを集め、表したいことを見付けるための指導をしていました。担任が切った木を組み合わせて、何の形に見えるのかを遊びのように演示したことで考える過程が可視化され、子供たちの想像力のスイッチが入り、楽しく取り組むことができたのではないかと思います。



図画工作は自由な発想や表現力を育む大切な時間です。しかし、そこに苦手意識をもつ子もいます。作文や自主勉強等と同様に、図画工作で何をつくるかを自由に考えることが苦手な子、見本を見せると見本通りにつくる子、発想はよいが丁寧に作業することが苦手で雑な仕上がりになってしまう子。学級には実に多様なタイプの子がいるはずです。

前述のように、演示・映像や画像等で想像力のスイッチを入れる支援は自由な発想が苦手な子に有効です。見本（完成、未完成）や行程を事前に提示する支援は、見通しがもてないと不安になる子に有効です。第2回の研修会でも実技を担当した先生方がたくさんの用具や材料をとともに多彩な見本を用意してくれていました。

もちろん、一人一人に最適な支援をすべての時間で行うのは至難の業です。しかし、自分の意志で決める場面を増やし、受容的・肯定的な言葉を掛けることで小さな「できた」を重ねる、完成作品が上手いいかなくても、そこまでの過程を認めるといった、どの教科にも共通する基本的な支援を積み重ねることが、望ましい学習集団作りにつながり、不安や苦手意識の解消にもつながるのではないのでしょうか。

どきどきとわくわくを大切に

図画工作科顧問校長 村櫛小学校 今田 徹

1学期に3年生の題材「立ち上がった絵の世界」を指導する機会に恵まれました。子供たちが試行錯誤しながら紙が立ち上がる場を考えることができるよう簡易な模型で試す場面を設定しました。子供たちは、教科書を参考にしながら、絵の世界を想像し独り言を言いながら試作をしました。1週間後の授業までに「材料を用意したよ」「次の授業が楽しみ」「図工大好き」と声をかけてくれるのは、私をどきどきさせました。子供たちは、立ち上がらせた絵の世界を考え、それに合う色や形を探し、絵の中に物語をつくりだしていました。鑑賞の場面で、その物語を熱く語り、それに聞き入る友達の姿にわくわくさせられました。



児童作品より

名古屋市美術館で、メキシコで画家・美術教育者として活動した北川民次の回顧展「生誕130年記念 北川民次展 ——メキシコから日本へ」が開かれています。

北川民次は静岡県に生まれ、1914年にアメリカに渡って美術を学び、21年から約15年にわたりメキシコで画家・美術教育者として活動しました。北川はトラルパンとタスコの野外美術学校で美術教育に携わり、帰国後は美術批評家・久保貞次郎らと交流して「コドモ文化会」を設立し、絵本作作を行い、そして戦後には、メキシコの野外美術学校の理念を日本でも実践すべく、名古屋の東山動物園で「名古屋動物園児童美術学校」を実現しています。

《夏の宿題》(1970)は、宿題をする子供を親や教育者たちが威圧的に取り囲む様子を描いたものです。北川がメキシコで学び、日本で実践した、子供の自主性を重んじる教育とは正反対だった現実を、批判的に示した作品です。「シユクダイがないと子供は何を考えていかわからなくなるとラヂオの先生がいいました。ナニが私たちをこんなにしたのでしょうか。」と机上の紙には書かれています。



私たち指導者が、製作者である子供たちの創造力を奪ってはいけません。実技研修に参加していただいた先生方には、製作するどきどきやわくわくが何より大切なことを感じていただけたのではないのでしょうか。

北川民次《夏の宿題》(1970)

展示風景より

第2回研修会（実技研修）

8月2日（金）、村櫛小、内野小、西気賀小、佐久間小にて第2回研修会を行いました。ワークショップとして彫刻、工作、鑑賞などの実技研修を行いました。普段は授業をする側の先生方も子供たちと同じように表現活動を行い、その楽しさを味わったり、実技を通して指導方法の工夫を探ったりすることができました。

なお、今回の研修会では、運営委員の先生の他に、実技研修講師、駐車場係、受付係を進んで引き受けてくださった先生方が多数いらっしゃいました。暑い中、本当にありがとうございました。

1・6部会「けずってみつけない形」（村櫛小）

はじめに各学年の立体造形の系統性について確認し、教科書に掲載されている粘土と石鹸を基に「子供たちの活動のしやすさ」や「身に付けたい資質・能力に合った材料」について考えました。出来上がった作品を鑑賞し合うことで、子供たちの思いを言語化することの必要性やそのタイミングについて活発な意見交換をすることができました。



3・4部会「顔を出したらなんだかワクワク・だんボールの形をかえて」（内野小）

段ボールを使った活動をしました。顔出しパネルをつくる活動では、穴の加工の際に適した道具を見付けたり、穴に合わせた絵柄を考えたりして、できた作品を見せ合いました。ボンドの液体に浸してつくる活動では、液体の濃度や材料の加工の仕方を工夫しつくる体験をしました。段ボールの様々な使い方を試すことができ、図画工作の材料としての可能性を感じるすることができました。



2・7部会「動いて楽しいわりピンワールド」（西気賀小）

割りピンで形を動かす仕組みを使って、動きの感じに合う形や色を考えたり、色々な方法を試しながらつくりたいものを考えたりしました。接着剤の使い方や角柱のつくり方など基本的な技能の指導について全体で確認を行いました。キットの選定のポイントも話し合うことで、授業前に教師がキットの中身を確認したり、試作を試してみたりすることの重要性を再確認することができました。



5・8部会「けずってみつけない形」（佐久間小）

ブロンズ粘土をけずって、2つの面に現れる形を楽しみながら「けずる」ことで材料に働きかける行為の楽しさや驚きを味わいました。また、みつけない形から「お話作り」をすることで自分の形の学びを楽しく言語化することも経験し、その重要性も知ることができました。学習の目的による材料選定のしかたや、教科書題材の児童に合わせてアレンジする大切さを実感できました。

